

(別紙 1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 『プラサンナパダー』第 18 章「我（アートマン）の考察」の研究

氏 名 新作 慶明

ナーガールジュナ (Nāgārjuna) 作『中論頌』(*Mūlamadhyamakakārikā*, MMK) の注釈書であるチャンドラキールティ (Candrakīrti) 作『プラサンナパダー』(*Prasannapadā*, PsP) は、MMK 諸注釈書のなかで現在唯一完本の形でサンスクリット原典の参照が可能なテキストであり、MMK の詳細な議論を明らかにするために不可欠である。本研究は、分別 (*vikalpa*)、戯論 (*prapañca*)、法性 (*dharmatā*)、真実の特徴 (*tattvasya lakṣaṇa*) などが説かれる、PsP のなかでも最重要章の一つと目される第 18 章「我（アートマン）の考察」の研究である。

本論文は II 部構成をとる。

第 I 部は本論であり、第 1 章序論、第 2 章『プラサンナパダー』第 18 章の文献学的研究、第 3 章『プラサンナパダー』第 18 章の思想研究、第 4 章結論からなる。

第 I 部第 1 章においては、PsP 校訂本の問題点や先行研究、および関連文献の近年の研究状況について、最新の研究を中心に概観した。

第 2 章においては、第 II 部の校訂テキスト作成過程で明らかとなった文献学的問題について考察を加えた。

第 1 節では、議論の背景となる MMK、および PsP チベット語訳の翻訳経緯について先行研究を概観した。

第 2 節では、MMK、および MMK 諸注釈における第 18 章の章題について考察を加えた。第 18 章の章題は、PsP サンスクリットテキスト (Skt) およびチベット語訳 (Tib) において「私の考察」、一方、『無畏論』、『仏護注』(BP)、*Prajñāpradīpa* (PP)、*Prajñāpradīpaṭīkā* (PPT) において「我と法の考察」と異なる章題が見られることが知られている。本研究では、PP において「我と法の考察」という章題が第 18 章末にだけ見られ、また、PP の本文において「私の考察」と第 18 章のことを指す用例があることを確認し、「我と法の考察」という章題は PPT の影響である可能性を指摘した。

第 3 節では、PsP 第 18 章に引用される MMK、『八千頌般若経』(*Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*、

Aṣṭa)、『四百論』(*Catuhśataka*、CŚ)とそれらのオリジナルとの異同について考察を加えた。

3.1 では、近年新たに同定された新出『中論頌』のサンスクリット写本(MMK Ms.)とPsP第18章に引用されるMMKとを比較すると、第2偈と第8偈において異なるテキストが見られる点について再考した。第2偈における「我所」のテキストが、MMK Ms.では“ātmanīya”と、一方、PsPに引用されるMMKでは“ātmanīna”と異なることは先行研究によって指摘されているが、問題点を整理し、これまでに用いられていない資料にもとづいて考察を深めた。従来“ātmanīya”の用例としてPsPに引用されるMMK第24章第15偈が知られていたが、サンスクリット写本を精査したところ、当該偈は“ātmanīya”ではなく、“ātmanīna”の用例が見られる偈頌であることを指摘した。そして、“ātmanīna”を注釈するPsPのテキストとして、これまでは、“ātmani hitam ātmanīnam”が知られていたが、用例を検証し、“ātmane hitam ātmanīnam”と修正することを提案した。また、第8偈における「[諸] 仏の教え」のテキストが、MMK Ms.では“etat tad buddhaśāsanam”と、一方、PsPに引用されるMMKでは“etat buddhānuśāsanam”と異なる点について再考したところ、先行研究の解釈が支持されることが明らかとなった。

3.2 では、PsP第18章に引用されるAṣṭaについて、PsP Skt、PsP Tib、Aṣṭa Skt、Aṣṭa ロンドン写本(Aṣṭa (L))、Aṣṭa デルゲ版(Aṣṭa (D))を比較考察し、PsP Tibに引用されるAṣṭaは、PsP Sktの翻訳ではなく、すでに完成しているAṣṭaの翻訳が挿入されている可能性を指摘した。そして、その挿入されているAṣṭaは、Aṣṭa (L)とよく一致することが確認された。これによって、先行研究で指摘されているPsPに引用されるAṣṭaの系統分類が支持されることが明らかとなった。また、PsP Sktは、Aṣṭaを「中略」しながら引用するが、「中略」の後に、場面の状況を説明する一文を挟んで引用を再開する、というテキスト編纂の一特徴が明らかとなった。

3.3 では、PsP第18章に引用されるCŚについて、PsP Skt、PsP Tib、BP、PP、PPT、CŚ、『四百論釈』(*Catuhśatakaṭīkā*、CŚṬ) Skt、CŚṬ Tibを比較考察したところ、チベット語訳に関しては、(1) BP、PP、PPT、(2) PsP Tib、CŚ、CŚṬ Tibの系統に大別され、また、PsP Skt、CŚṬ Sktは(1)の系統とよく一致することが確認された。この系統分類によって、PsP Tibに引用されるCŚ、およびCŚṬ Tibに引用されるCŚは、PsP Skt、およびCŚṬ Sktに引用されるCŚの翻訳ではなく、すでに完成しているCŚの翻訳が挿入されている可能性を指摘した。また、(1)の系統であるBP、PP、PPTはレイゲンツェンによる翻訳であり、(2)の系統であるPsP Tib、CŚ、CŚṬ Tibはニマタクによる翻訳であるが、それぞれMMKの「旧訳」と「新訳」の翻訳者に対応する。これによって、CŚにはMMKと同じように、旧訳が存在していた可能性を指摘した。

第3章においては、PsP第18章を第1～5偈までの前半部と第6～12偈までの後半部に分け、それぞれを「真実への悟入」と「教説」という観点から【議論1】【議論2】として関連文献とともに考察した。また、PsP第18章におけるバーヴィヴェーカ批判については、【議

論 3】として論じた。

【議論 1】の「真実への悟入」は、端的に第 5 偈で説かれる。

業と煩惱が尽きることから解脱がある。業と煩惱は分別（分析的思考）にもとづく。それら（分別）は、戲論（概念化）にもとづく。一方、戲論は空性において滅する。（MMK 第 18 章第 5 偈）

PsP 第 18 章の文脈を同じくチャンドラキールティ作の『入中論釈』（*Madhyamakāvatārabhāṣya*）とともに精査したところ、外教徒によって構想された我は、真実としても世間的にも存在せず、また、そのような我に属するものとしての我所も存在せず、それらの我や我所は、非実在的な概念にすぎないものであり、戲論に相当するということが明らかとなった。また、『入中論釈』では、有身見は「＜私は＞と思うこと」（我執）と「＜私のもの＞と思うこと」（我所執）からなると説かれ、また、PsP では我執・我所執なる分別（*kalpanā*）と説かれていることが確認された。したがって、分別は、我・我所という戲論を対象とする我執・我所執、すなわち有身見に相当するということが明らかとなった。この点を考慮にいれて第 5 偈を再解釈すると、空性において（空性を見る場合に）〔我・我所なる〕戲論は滅し、戲論が滅することから、〔我執・我所執という〕分別（＝有身見）が起こらず、分別が起こらないことから業と煩惱が滅し解脱する、これが真実への悟入であるということが明らかとなった。

【議論 2】では、「教説」という観点から PsP 第 18 章後半部の文脈を精査したところ、教説は本来言葉や認識を越えている真実や法性に悟入させるために説かれる、ということが確認された。また、PsP 第 24 章に説かれる二諦について従来あまり指摘されていないテキストの問題を含めて再考したところ、智慧の乏しい者には勝義の教説に相当する自性空だけが説かれればよいというのではなく、その前段階として、世間的な教説に相当する「世間的な勝義」が必要であることが明らかとなった。このような教説の次第という視点をもって PsP 第 18 章の文脈を再考したところ、最終的に到達されるべき「いかなる我もなく無我もない」（MMK 第 18 章第 6 偈 cd 句）、あるいは「〔すべては〕正しいのでもなく正しくないのでもない」（同 8 偈 c 句）だけが説かれればよいのではなく、教化対象に応じて「我」や「無我」という伝統的教説が（第 6 偈）、あるいは〔すべては〕「正しい」・「正しくない」・「正しいかつ正しくない」という次第（第 8 偈）が必要であることが確認された。また、これらの「我」・「無我」、あるいは「正しい」・「正しくない」は戲論であり、究極的には越えられるべきものである。一方、上述の教説の次第は主体の知の相違とも関連するが、真実に関しても言葉や認識を越えている「聖者にとっての真実」と「世間的な真実」とが分けて説かれている。「あるもの（A）に依ってあるもの（B）が生じる」（第 10 偈 ab 句）で示される世間的な真実であるが、同じそれは、聖者の知に関連して「不一・不異、不常・不断」と説かれるのである。世人と聖者の知の相違という視点は、これまで『入中論釈』における二

諦の文脈で説かれることは知られていたが、本研究により教説や真実についても適応されるべきであることが明らかとなった。

【議論 3】においては、PsP 第 18 章に見られるバーヴィヴェーカ批判を再考した。当該の議論は、チャンドラキールティが PP を引用してバーヴィヴェーカの「声聞は空性を了解しない」という解釈を批判する箇所として知られているが、テキストを精査したところ、PsP に引用される PP と PP オリジナルとの間にはテキストに違いが見られ、さらに、当該の PsP Skt と PsP Tib においても違いが見られることが明らかとなった。

第 4 章結論では、第 2 章、第 3 章で明らかになった点をまとめ、最後に PsP 第 18 章全体の構成および主題を考察した。【議論 1】で見たように、PsP 第 18 章前半部では、煩悩の根元としての戲論とその戲論が滅する次第が説かれており、また、【議論 2】で見たように、後半部では、教説は戲論を離れた真実への悟入のために説かれていることが確認された。これによって、PsP 第 18 章「私の考察」は、戲論を主題とすることが明らかとなった。

第 II 部は、『プラサンナパダー』第 18 章の校訂テキストおよび訳注研究である。第 1 章は、今日参照可能な 17 本あまりの写本のうち、先行研究で重要視されている 6 写本を用いた『プラサンナパダー』第 18 章サンスクリット校訂テキストである。第 2 章は、チベット語訳の五大版本（デルゲ、チョネ、北京、ナルタン、金写）を用いた『プラサンナパダー』第 18 章チベット語訳校訂テキストである。第 3 章は『プラサンナパダー』第 18 章訳注研究である。